

ムサビの教員が選ぶ

美大生におすすめの本

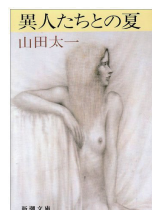
Recommended books for art students.

通信教育課程 油絵学科
(日本画表現コース)、
(兼) 造形学部 日本画学科

室井佳世教授

『異人たちの夏』(新潮文庫)

山田太一 著, 新潮社, 1991



経緯は、先に映画を観てから原作本を読んだ。

学生の頃、大林宣彦監督作品をよく観ていた。私の郷里も瀬戸内ということもあり、尾道三部作を幾度も観ては「このシーンはこの路地のはず」とアタリをつけて現場検証していた。

『異人たちの夏』は他の大林作品とまた異なるものを感じる。尾道が舞台ではないことも大きいかも知れないが、原作の山田太一のにおいをあえて残しているように感じる。それほどこの原作にリスペクトがあったのではなかろうか。

幾度も映画を観たが、観る私の年齢に応じて入れ込むキャラクターが移動する。両親役の片岡鶴太郎も秋吉久美子もいい。あの時代の若い母親が着るノースリーブの「簡単服」がよく似合っていて美しい。浅草のすき焼屋で消える間際に告げる言葉には何度観ても同じところで泣かされてしまう。これほど親の気持ちが凝縮された言葉が他にあらうかと思う。

しかしただの人情モノにあらず。そこは大林。ファンタジー色を絶妙のバランスで織り交ぜ唸らせる。ここに高い造形性を感じるのだ。モノつくりのだいじなところを教示している映像作品と原作本であると思う所以である。イギリス人監督のアンドリュー・ヘイによる作はまだ観ていないが、設定を変えリメイクしているときく。こちらも興味が募る。

そもそも山田太一は「自分のいいところも悪いところも全部ひっくるめて受け止めてくれる存在というのが幼いころに亡くなった幻想の中の両親。中年の男が甘える設定など誰もみたくないが、そのままではなくファンタジーの力を借りて亡くなった両親であれば成立するのでは。」と自伝的要素をベースに加工していることを語っている。

「ありのままの風景に創意工夫を加えたら、それが作品になる」とはかの浮世絵師歌川広重の言葉である。どこを残しどこを置き換えるか、を読み解き結び付けつつ映像を観て原作本を読むのは、造形を学ぶ上で興味深かった。

イメージライブラリー 映像資料

『異人たちの夏』

大林宣彦 監督, 1988



関連映像資料

『異人たち』

アンドリュー・ヘイ 監督, 2023

所蔵なし

オフィシャルサイト

